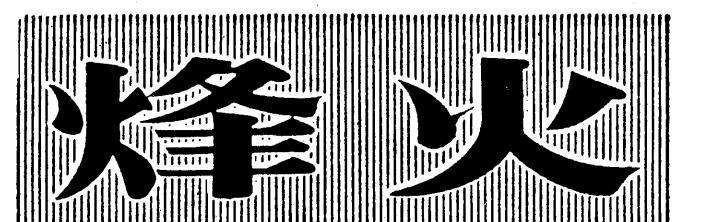


☆帝国主義の侵略反革命を粉碎し全世界の帝国主義を打倒せよ！ スターリン主義との国際党派闘争を組織し、世界プロレタリア革命—世界プロ独立共産主義を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に創建せよ！

1984年
3月20日
第354号
編集発行人 高木一夫
一部 200円



共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 Tel(06)371-3706

○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫
○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫

■ 東京戦旗社 東京中央郵便局 私書箱1114号



共産同政治集会がちどる

3・3

三月三日、共産主義者同盟（全国委）主催の共産同政治集会が関西においてかちとられた。集会には階級的労働運動の建設の先頭に立ってたたかいぬいてきた戦闘的労働者を中心にして、労学約九〇名が結集した。

開会宣言をうけて、まず三里塚芝山連合空港反対同盟からメッセージが代読され、つづいて同志社大学全学戦線（準備会）、全国労働者政治委員会・事務局、戦争問題を考える会からそれぞれ連帯の挨拶が、熱情をこめておこなわれた。

基調報告に立った共産同（全国委）の同志は、社共にかかる労働者階級の眞の前衛党的建設をわが共産同こそがになねばならないことを、力強く訴えた。

階級闘争に起ちあがらねばならないことを、力強く訴えた。そして基調報告をふまえて、四人の同志から次々に、労働運動、政治闘争、学生運動、全国労政建設のそれぞれの領域における共産同（全国委）の基本指導方向・方針が提起され、かたい意志一致がかちとられた。

三・三政治集会は、革命党建設の宣伝・組織戦として大きな成功をおさめた。とりわけ労働者活動家のなかに、党建設の重要性をもちこみ、彼らの党建設への意欲を育くむことのできた意義は大きい。ひきつづきわれわれは、マルクス・レーニン主義で武装した鉄の中央集権合法党建設の事業を、大胆に断固としておしこめていくであろう。

八年に入つて、米帝をはじめとする各國帝国主義の侵略反革命戦争（準備）との闘争がますます緊要の任務となつてゐる。

二月一日、米帝リーガン政権は、八五会計年度「国防報告」「軍事情勢報告」「予算教書」を発表した。三一三四億ドル（わが国予算総額の一・五倍、対前年度比十八・一%増、米国家予算の二九・四%）にのぼる八五会計年度軍事予算はベトナム戦後最高のものであり、アメリカは事実上の戦時体制にある。

この一連の報告につらぬかれる目的は、第一に対ソ核戦争に勝利しうる軍備をととのえようとしている。レーガン政権は、「戦術核兵器の先制使用もありうる」

と公言し、「同時多発報復戦略」のもと「ソ連がある地域で攻撃を加えた時、それ以外の地域でも同時多発的に核兵器による報復をおこなう」と宣言してきた。そのため、昨秋十一月には西欧諸国に中距離核ミサイルパーシングIIと巡航核ミサイルの配備を強行した。そして、八五会計年度には宇宙兵器の開発を強化し、MX（次期ICBM）四〇基、B1（戦略爆撃機）三四機を配備することを決定している。なかでも、われわれは、巡航核ミサイルIIトマホークの六月極東配備を決定的に重視しなければならない。

レーガン政権は、八五会計年度国防報告、軍事情勢報告の中で、核弾頭装備の対地攻撃用トマホークII TLAM-Nをニュージャージー、アイオワなどの戦艦および攻撃型原潜から配備していくことを明らかにした。核トマホークは、射程二四〇〇～二六〇〇km、広島型原爆の十五倍から二〇倍の威力をもち、コンピューター誘導によって

プロレタリア政治闘争の前進を

膨れあがる米・日の軍事予算

全国のたたかう労働者人民諸君！ 八四年春期闘争の幕は切つておとされた。全世界の階級闘争の前進と結合し、今春、トマホーク極東配備阻止、全斗煥来日阻止、三里塚二期着工策動粉碎、春闘勝利おかげ、たたかいの最前線に起つて！

六月トマホーク極東配備阻止／全斗煥来日阻止！

ほぼ一〇〇%の命中精度をもつものである。そして、その多くは横須賀、佐世保にひんばんに入港する第七艦隊所属艦艇に積載される。トマホーク配備によって太平洋は核の海と化し、日米安保は核安保として飛躍的に強化されようとしているのだ。

第二に、反帝民族解放闘争の圧殺をより大規模におしすすめることである。レーがソノ政権は、昨年のグレナダ軍事侵攻、ニカラグア反革命右派ゲリラの支援など全世界で反帝民族解放闘争、反帝民族解放―社会主義革命を鎮圧するための軍事介入、反共軍事独裁政権へのテコ入れをおこなつてきただ。そして、八五会計年度には、「特殊作戦部隊」(SOF)を創設し「十五ヶ国の武装部隊と合流し、不安定と侵略に効果的に対処する訓練」をおこなうとうちあげている。米帝は、反共軍事独裁政権のテコ入れにとどまらず、グレナダ侵攻のように米軍を直接投入し、労働者人民の闘争をたたきつぶす準備に大規模に着手しはじめたのである。

そのため、米帝は、NATO、安保を即戦体制として強化していこうとしている。そして、全世界的に、米軍を中心とする合同軍事演習を強化している。二月一日から開始された米韓合同軍事演習チームスピリット'84は米軍六万人、韓国軍十四万七千人を投入し、朝鮮半島をすさまじい緊張下において八〇日間にわたってひろげられている。それは史上最大規模といわれた昨年をさらに一万六千人上まわり、グレナダ侵攻に用いたVH80ブラックホールヘリを投入するなど、朝鮮民主主義人民共和国への軍事侵攻を直接的に想定したものである。これと並行して、三月からは合同軍事演習リムパック'84が開始されている。

他方、日本の情況はどうか。

日帝II中曾根政権は、昨十二月総選挙で過半数すら確保できない敗北を喫した。しかし中曾根は「政治倫理問題で批判をうけただけであり、外交・防衛などの政策は承認された」と強弁し、「戦後政治の総決算」をかけた侵略反革命戦争とファシズムの準備につき進んでいる。八四年度予算案は、そのことをはつきりと示した。

総額五〇兆六二七二億円(前年度比〇・五%増、一般歳出に限れば〇・一%減)といふ「緊縮予算」のもとで、防衛費は二兆九三四六億円(前年度比六・五五%増)といふ三年連続で急増している。さらにこの防衛費は、すでにGDP比〇・九九一%に達し、八四年度公務員ベアが三・〇七%をこえれば自動的にGDP一%の枠を越えるものであり、際限ない軍拡への道をひらくものである。また実質的には、日本の輸出市場の開拓とアメリカの対外援助、対外政策の肩がわりにあてられている政府開発援

助費が九・七%増と急増している。このように安保・自衛隊の強化と侵略反革命のために、湯水のように金をそぎこみ、社会保障、教育、地方財政への援助などは極力きりつめるという予算の中に、戦争準備に第一の目的をおく中曾根政権の性格があざやかに示されている。さらにも中曾根政権は、「愛国心を教えることも教育の目的」とのべ、教育臨調を設置し、六・三・三・四制の解体も含む教育の排外主義的大再編にとりかかっている。

日帝II中曾根がこのように戦争とファシズムの準備に突き進もうとする時に、議会内野党はこぞって自民党への合流と屈服にふみだした。総選挙後いち早く新自由クラブは自民党との連立に走り、民社党は自民党への閣外協力を意味する政策協議の場を自民党に作るようよびかけた。

なかでも、「ニュー社会党」を唱える社会党石橋執行部は、「自衛隊II違憲・合法論」をうちあげ、社会党が政権をとってもすぐに自衛隊をなくさないと宣言した。国会の多数決によって決定されたものはすべて合法だと言うなら、どうして安保・自衛隊とたたかうことができようか。社会党は、まがりなりとも全国の反戦反基地闘争にかかわってきた歴史のいっさいを清算し、日帝の戦争準備の擁護者へ急速度に転落していっている。社会党の右転落を批判する日共も「軍事費と国民生活は両立しません。大砲もバターもが両立しないとすればどちらを選ぶかです」などと主張し、日帝の侵略反革命戦争準備が、日帝の打倒をぬきにして変更することの可能な一政策であるかのように描きだし、小ブル平和主義の害毒をばらまいている。

今春季、われわれは、米帝レーガン戦略を中軸とする侵略反革命軍事同盟の強化と、第二次中曾根政権の戦争とファシズム準備との闘争に全力でたちあがらねばならない。なかでもチームスピリット'84を弾劾し、六月トマホーク極東配備阻止に全力で決起しなければならない。それは、朝鮮アジアにおいて英雄的にたたかわれている反帝民族解放闘争、反帝民族解放―社会主義革命闘争にたいするわれわれの国際主義的連帯にかけた責務である。

この全斗煥来日の目的はなにか。

それは第一に、高揚する韓国・フィリピンなどのアジアの反帝民族解放闘争を鎮圧するために、ソ連と軍事的に対抗しつつ、日米韓反革命軍事同盟を完成化させることにある。とりわけその、もつとも弱い環として存在してきた日韓の軍事同盟を固めることこそ、全斗煥来日の最重要の目的である。

光州蜂起を血の海に沈めることによつて権力を握った全斗煥は、八一年二月に訪米し、「韓国は反共の砦」としてうちあげた。一方日帝II中曾根は、昨年の訪米時において「日本列島不沈空母化」「四海嶼封鎖」を宣言した。これらをうけて米帝IIレーガンは、昨年の来日時の国会演説で「三本の矢」II日米韓の軍事同盟化を公言し、その足で訪韓した。

発表された米韓共同声明は、「韓国の安全が北東アジア……同時にアメリカの安全にとって死活的」と宣言し、レーガンはソウルから全米むけラジオで「安保の領域では日本・韓国両国が(アメリカとともに)軍事分担について重要分担を約束」と、日米韓の軍事同盟の総仕上げにむけて、その意図をあからさまにしたのである。

そして残るはいよいよ日韓の公然たる軍事同盟の確立である。すでに昨年九月、第十一回日韓議員連盟総会の場で、安保協力問題がはじめて正式議題にのぼり、「安保・外交常務委員会」の設置が決定されたように、その布石は「日韓新次元」なる名のもとにひかれつつある。日帝は昨年九月のKAL機墜事件、十月のラングーン事件を利用しての反共排外主義扇動を柱に、全力で日米韓反革命軍事同盟の完成化を推進してきた。全斗煥来日はその総仕上げとしてもくろまれてゐるのである。

目的の第二は、天皇ヒロヒトと全斗煥の会見を実現することにある。「國賓」として来日した元首は天皇と会見するという慣例を利用したこの攻撃のねらいは明らかである。教科書問題をめぐつて激しい反日(帝)闘争が噴出したように、戦前の日帝の朝鮮侵略にたいする怒りはいまなお南朝鮮労働者人民の中に脈うち、今日の日帝の支配にたいする闘争を支えつづけている。日帝II中曾根は、天皇―全斗煥会談によって、戦前の朝鮮侵略の歴史を日帝の側から反動的に清算すること、南北朝鮮人民の反日(帝)闘争を解体していくこと、同時に全斗煥軍事独裁政権の擁護と、それへの全面的テコ入れを天皇の名によつて宣言し、日本の労働者人民を排外主義的に組織すること、これらを一举にはたさんとしているのである。天皇―全斗煥会談は、日本帝国主義の南朝鮮新植民地主義支配と日韓反革命軍事同盟のすさまじい強化の号砲となるものである。

第三に、このかんの「南北統一」をめぐる流动の中で、南北分断固定化―「クロス承認」

をおし進めることにある。朝鮮民主主義人民共和国によつて提案された「朝鮮問題の平和的解決のための三者会談提案」(いわゆる三者会談)は、朝鮮労働党の高麗民主連邦共和国統一構想にもとづいて、朝鮮戦争以来の停戦協定を平和協定にすること、在韓米軍撤収の実現、南北不可侵宣言などを要求するものである。これにたいし米帝は、中国を含む四者会談提案をもつて逆襲し、また日帝は日本とソ連を含めた六者会談提案をもつて対応した。一方、全斗煥は「南北最高責任者会談」を逆提案するとともに、日米の提案にも参加する旨を表明している。これら日・米・韓に共通する意図は、南北両朝鮮の分断固定化、「クロス承認」策動をおし進めることにある。中曾根は全斗煥来日によつてこれを謀議し、韓国軍事独裁政権の国際的認知をはかり、対韓新植民地主義支配を確立せんとしているのである。

八三年をとうして南朝鮮における民族解放闘争は広く深くその前進を刻印した。光州蜂起をさかににして、かつて「反米無風地帯」といわれた南朝鮮において、釜山米文化センター放火事件や昨年九月二一日の大邱米文化院爆破などの直接的闘争を含みつつ、反米(皇帝)のたたかいは全人民的質へと確立された。さらに日帝の侵略に反対するスローガンが、発表される闘争宣言文には必ずもりこまれるに至つている。また昨年九・三〇「民主化運動全国青年連合」結成に示されるごとく、闘争の組織性・全国性においても格段の前進をとげている。

このようなたたかいの前進にたいし、全斗煥はKAL機事件やラングーン事件を利用した反共大扇動を組織し、さらに「北傀(北朝鮮)の赤化統一策動にたいする組織的譲揚および流布」をおこなつたとしてたたかう人民を逮捕・弾圧し、また「夜学連事件」で四〇〇名近い強制捜査をくりひろげた。しかし全斗煥政権がいくら反共宣伝をやつきになろうとも、南朝鮮人民は、ラングーン事件でむしろ全斗煥が生き残つたことをこそなげいているのであり、全斗煥軍事独裁政権の運命は末期的状態なのである。

昨年の反レーガン闘争は、事実上の戒厳令を突き破り、全斗煥軍事独裁によるソウル大生一名の虐殺をはねのけ、反米(帝)反日(帝)をかいとして燃え広がつた。そして何よりもこれらたたかいの中から、全斗煥打倒をその背後に存在する日米両帝国主義の一掃と結合させ、武装闘争、社会主義へとその道を求めるようとする先進的部分が生みだされつづあるかかる朝鮮人民の反帝民族解放闘争と連帯し、全斗煥來日を阻止することは、日本プロレタリアート人民の第一級の国際主義的責務である。

「クロス承認」策動をおし進めることにある。韓国軍事独裁政権の国際的認知をはかり、対韓新植民地主義支配を確立せんとしているのである。

八三年をとうして南朝鮮における民族解放闘争は広く深くその前進を刻印した。光州蜂起をさかににして、かつて「反米無風地帯」といわれた南朝鮮において、釜山米文化センター放火事件や昨年九月二一日の大邱米文化院爆破などの直接的闘争を含みつつ、反米(皇帝)のたたかいは全人民的質へと確立された。さらに日帝の侵略に反対するスローガンが、発表される闘争宣言文には必ずもりこまれるに至つている。また昨年九・三〇「民主化運動全国青年連合」結成に示されるごとく、闘争の組織性・全国性においても格段の前進をとげている。

このようなたたかいの前進にたいし、全斗煥はKAL機事件やラングーン事件を利用した反共大扇動を組織し、さらに「北傀(北朝鮮)の赤化統一策動にたいする組織的譲揚および流布」をおこなつたとしてたたかう人民を逮捕・弾圧し、また「夜学連事件」で四〇〇名近い強制捜査をくりひろげた。しかし全斗煥政権がいくら反共宣伝をやつきになろうとも、南朝鮮人民は、ラングーン事件でむしろ全斗煥が生き残つたことをこそなげいているのであり、全斗煥軍事独裁政権の運命は末期的状態なのである。

昨年の反レーガン闘争は、事実上の戒厳令を突き破り、全斗煥軍事独裁によるソウル大生一名の虐殺をはねのけ、反米(帝)反日(帝)

三里塚闘争が直面する課題

三・八分裂から一年がたつた。三里塚闘争は、プロレタリア階級闘争の一翼への発展という歴史的事業を前に、この前進をいったん中断させるものとして存在した。それは、この歴史的事業をなすべき、プロレタリアーによる三里塚闘争と階級的労働運動との結合の条件が、まだ築きあげられていないという今日の日本階級闘争の否定的現状の反映であるとともに、この歴史的事業にたえられない路線的限界ゆえに、急進民主主義、右翼日和見主義諸党派によって、ひきおこされたものにほかならなかつた。

三里塚闘争は、わが国のプロレタリア階級闘争の中で、孤立してたたかわれながらも、一八年間の不屈のたたかいを通して、日本階級闘争の不屈の先端拠点、全国で唯一の政治決戦場としての地平を營々と築きあげてきた。明らかにそのたたかいの出発は、農民階級の闘争であり、土地を守れ闘争でありますながらも、國家権力との非妥協のたたかいの中で、軍事空港粉碎を自己のスローガンとすることによって、農民と全人民の共闘へと発展し、反帝・反政府闘争の最高峰へと、自己の位置をおしあげたものである。

この地平は革命党と革命的プロレタリアーとに、三里塚闘争そのものを、プロレタリア階級との共闘を通して、プロレタリア階級闘争への一翼へと脱皮せしめること、同時に、農民階級の利益にのみとどまることのないこの領導者を、反対同盟の先進的農民の中から生みだすことを要求した。それが唯一の日本階級闘争の前進にとっての道であり、そして三里塚闘争の発展にとっての道であつた。

「一坪共有化運動」の方針上の対立に端を発した三・八分裂は、急進民主主義、右翼日和見主義による、この道からの逃亡、敵対であるのみならず、政治決戦場として築きあげられた三里塚闘争一八年の地平そのものを清算せんとするものであった。それは、この一年間を通じて、より一層はつきりとなりつた。

急進民主主義II中核派は、農民とプロレタリアートとの階級的区别をすてり、革命党によるマルクス・レーニン主義上の農民指導の原則的見地をすてり、政府に対する戦術上の戦闘性の一致のみをもつて、三里塚闘争を展望せんとした。三里塚闘争が、農民といふ不斷に動搖する階級的立場を保持したまま、革命的任務をになうことができると強弁し、三里塚闘争と革命運動の結合を強調すればするほど、「農地死守」という農民の直接的意識に依拠するという矛盾と誤まりを彼らは拡

大した。それは、右翼日和見主義を批判するよう見せかけながら、三里塚闘争の全人民性を支えた軍事空港粉碎のスローガンに示される反戦・反政府・反帝の質を、狭い戦術上のものにすりかえ、実際上は、後景に追いやりのものであつた。

これらは、中核派の急進民主主義革命路線II「先制的内戦戦略」の誤まりから生みだされた路線的帰結である。すなわち反対同盟の基本方針は、それ自体が全国的内乱、内戦・蜂起の質をはらんでいると強弁し、三里塚闘争を革命の戦術拠点に直結させる立場である。それは社会主義革命の勝利を、プロレタリアートの正規の攻開軍、赤軍とソビエトの歴史的建設と切り離して夢想する誤まりであり、また先進的農民を社会主義革命にむけた階級闘争に組織していくことは無縁の、農民運動の戦闘性を、それも代行主義的に表現するという転倒した誤まりである。

このかんの第四インターに対するテロルも、単に偶發的なものではなく、彼らの路線的基本性を物語る以外の何ものでもない。それは転倒した「革命の戦術拠点」を一切の政治基準に、代行主義的な戦術上のヘゲモニー争いに起の質をはらんでいると強弁し、三里塚闘争と階級闘争との暴力的発動をおこなつたものであります。われわれはこれを三里塚闘争と階級闘争の利益とは無縁の反階級的テロルだと考える。なぜならそれは、中核派が、三・八分裂に至る数年間、反対同盟内部にプロレタリア階級闘争への脱皮をめぐる流動が始まつた時、それを前むきの流動ととらえ原則的党派闘争をもつて発展させようとはせず、逆に狭い戦術上の対立に閉殺してきたことの延長上にあらざるものであり、この閉殺・破壊を暴力的になすものだからである。

他方、四トロを先頭とする右翼日和見主義潮流は、形式上農民とプロレタリアートの区別をなし、その形式区別の上に労農同盟を起き、実質は農民の要求とその他の民主主義要求を何らのプロレタリア的媒介もないままに、それぞれの最低限の要求をもつて横断的に結合せんとするものであつた。それは、今日に至る政治的決戦場としての三里塚闘争の地平を全面清算し、反自民を唯一の政治基準とした自民党農政に反対する農民運動のレベルにまで解体し、三里塚闘争を市民主義・議会主義政治潮流の一翼へと組みこまんとするものである。三・八分裂は、これを全面開花させ、全民政治要求のスローガンが「緑の大地」にぬりかえられて久しい。

これら急進民主主義・右翼日和見主義の二つの路線は、プロレタリア社会主義革命に対する原則的誤まり、そして、三里塚闘争と農民指導におけるプロレタリア党としてのあいまいさから生みだされている。今日の対立は反帝闘争にまで行きつながら、これをプロレタリア革命との結合をもつて突破することを展望しない今日の三里塚闘争と農民の、

逢着点そのものと同じ土俵で争われんとしている対立であり、そしてそのことによって、全国人民政治闘争としてあつた三里塚闘争を、ますますわが国の労働者人民から遠ざけることへと結果しているのである。

革命的プロレタリアートがめざすべき道は、この三里塚闘争の逢着点を根幹から突破するものでなければならない。それは、三・八分裂をもたらしたところの本質的問題と、いさかでも切り離された、戦術局面に右往左往するものであつてはならず、三里塚闘争の前進にたちはだかる、一方での急進民主主義戦闘路線、他方での、右翼民主主義路線の双方を、断固として批判する道として選択されなければならぬ。

すなわち、それはわが国におけるプロレタリア革命と農民階級との根本的結合を切り開く道であり、反帝闘争にまで行きつきながらも、そこで民主主義路線に頓座させられた三里塚闘争の戦略的問題を、プロレタリア革命の真の同盟軍へと、わが國被抑圧農民を組織する革命党と革命的プロレタリア人民につきつけられた重大な任務として、ひきうけることにほかならない。ひきづく日帝・国家権力の三里塚闘争鎮圧・反対同盟解体攻撃を断固として粉碎し、第一に、農民階級のたたかいをプロレタリア階級闘争の一翼へと転化せしめるにたるプロレタリア階級闘争の前進、階級的労働運動の建設をもつてする労働運動の変革と三里塚闘争の結合をなんとしてでも全力で切りひらかなければならない。第二に、これを領導する党路線の確立と、それをめぐる原則的党派闘争の組織化が、断固として切

りひらかれねばならない。

以上をふまえて今春期、われわれは階級的労働運動と三里塚闘争の結合、革命的農民の建設のために全力をあげるであろう。

全国労政を大衆の

政治的前衛へ――

春季三・四月闘争の任務を次のように提起する。

第一に、トマホーク極東配備阻止、全斗煥来日阻止をかげ、プロレタリア政治闘争建設の事業を前進させていくことである。昨秋レーガン闘争においてわれわれは京都労働者実行委を組織し、大衆的プロレタリア政治的統一戦線建設の第一歩をふみだした。今春京労実第二回闘争の準備に着手し、大阪・東京における統一戦線建設の準備を開始していくねばならない。右翼日和見主義はますます市民主義に溶解し、「トマホークが配備されればソ連のSS20が日本を狙い、日本が核の戦場になるから反対だ」と排外主義とすらいう主張をふりまいっている。これと厳しくたたかわねばならない。トマホーク配備への不安と怒りをプロレタリア階級の中に広範に潜む反戦平和の要求のほりおこしと結びつけて組織すること。そしてたちあがるプロレタリアートを安保一日帝の侵略反革命戦争準との闘争を中心とするプロレタリア政治要求に結集させていくために全力をつくさねばならない。全斗煥来日阻止闘争は、南朝鮮労

第三に、三・二五三里塚現地闘争の新たな前進方向を指示すことである。日帝II中曽根の二期着工攻撃に痛打をあびせ、公団と一体になつた成田用水推進派による菱田成田用水建設を粉碎せよ。「左」右の日和見主義者どもの敵対を粉碎し、プロレタリア社会主義革命の同盟軍へと農民を組織する歴史的事業に基準づけ三・二五をたたかいてきらねばならない。

第四に、全国労働者政治委員会建設の新たな段階をふみ出すことである。全国労政は昨年九月の結成以来半年間の闘争を通して、階級的労働運動の陣型にしつかりと根ざした再生産構造をもつ先進的プロレタリアートの革命の組織へと前進してきた。今春季、労政は労組大衆に直接の指導責任をもつ前衛として春闘を領導すること、そして全国的な労組連合の組織へと前進してきた。今日の労戦統一と労組大衆に直接の指導責任をもつ前衛として春闘を领导すること、そして全国的な労組連合の戦略部隊としての登場をかちとらねばならない。ともにたたかわん！

である。

われわれは自らのつくりあげた階級的労働運動の陣型を保守することにいささかも留まることはない。

い。全国的に例をみない地平を築いてきた洛南労組連絡のたたかいもまた、このような日本階級闘争の根本的変革のためのトバ口に立つたばかりである。



会場をぎっしり埋めて討論がつづく
(京都集会 2月14日)

産報化に抗す階級陣型を

われわれにとって階級的労働運動とは、右翼的労戦統一に対する防衛のたたかいに一面化されるものではなく、組合主義・経済主義とたたかい、基礎からの階級形成の戦場へと労働組合とそのたたかいをつくりかえることであり、わが國労働運動が総評主義の限界のもとで敵にとりこまれてきたことを

根底から突破する攻勢的たたかいである。全民労協の制圧と総評労働運動の最後的崩壊の中で、その決定的チャンスをわれわれはつかみ切らねばならない。総評再生を

夢想しこの幻想のもとに労働者を

つなぎとめていく部分や、下層労

働者のたたかいに実態的に依拠す

ることをもってことたりとする

ことをもつて実現できない任務

全社會的な侵略戦争への動員を押

階級的労働運動の建設めざし 全国で労政集会

2月

しすすめ他民族抑圧に狩り出さんとするものであること、(2)高度経済成長を土台に成長した総評労働運動はその歴史的生命を失なつており、全民労協への屈服は必然であること、職場闘争と地域共闘という継承すべき伝統はわれわれの手によつてこそ発展させられねばならないこと、(3)そのために洛南労組連の地平を関西全域へ、東京へ拡大し、左派ナショナルセントラルの準備をも展望する全国的なたたかう労働組合の連合を形成すること、京労実を強化し、プロレタリア政治統一戦線を全国的に構築すること、さらに個別労組の枠をこえた青年活動家組織を地域的・全国的に建設すること、そしてこ

のたたかいの先頭に労政を躍起にしていくべきことを問題提起して、各地区で活発な討論がおこなわれた。

山市と呼んでいた。労連神戸支部の若い組合員を対象に開催された。神戸労政の同志が自分たちが労働組合の権力を行使して階級的労働運動の創建に向組織を結成し、学習会等を通して公然化の準備をしてきたことを告し討議を訴えた。全国労政の問題提起を受けた後、未組織の組織化をどこから始めるのか、右翼戦統一派との分岐をいかに引くか等の論議が熱心になされ、最に主催者の側から、「この討論を第一歩として神戸の地から戦つかう階級的労働運動を築きあげ

いく」という力強い宣言でしめくつた。

東京においては東京労政主催でおこなわれ、昨年十一・六東京集会に京労実とともに決起した首都圏の先進的青年労働者・学生が結集した。討議は主に首都圏において階級的労働運動陣型とプロレタリア政治統一戦線を準備していくことをめぐって、未組織の組織化地域共闘、京労実総括と労働者の政治闘争にとっての民族解放闘争との連帶のたたかいの重要性等に集中した。首都圏においてこの事業を成功させるカギは労政の戦略的展開にかかる。討論会はそのための一歩をしるしえたのである。

2•11~12

第80回全国労働者討論集会

未組織労働者の組織化に焦点

二月一日から一二日にかけて大阪の部落解放センターにおいて第八回全国労働者討論会が開催された。「自ら起つて大衆闘争を組織し、全国労組連、労研センターを強化しよう！」をメイン・スローガンとしておこなわれたこの集会には、全国から約九〇〇名が参加し、七つの分科会で討論がおこなわれた。

八回を数えた今回の全国労働者討論集会の特徴点は、次のようなものであった。

第一に、労戦右翼再編にたいする切迫感を反映して、未組織労働者の組織化や逆行革などの実践的課題が、集会の全過程をつらぬいて、大きくクローズ・アップされ

第二に、これをおれせて、この
かん各地で奮闘しつづけてきた地
域共闘組織の実践（洛南労組連ら
全金港合同、東京東部での実践など）
が注目をあつめ、その成果の
共有化のための努力がおこなわ
たことである。

第三には、全民労協に対決する
独自の左派陣型構築の気運が一
度徐々に高まりながらも、依然其
調的には全国労組連と労研センタ
ーを並列に置いて、その相方の政
化を主張するという点に象徴され
るよう、総評主義の縛りからま
つたく自由になつていないと
点である。

総じて、たしかに今回の集会に
おいては「反対派からの飛躍と生
体形成に多くの参加者は意識を共

有していかないのではないか」労働報一六〇号)といふ状況が存在した。官公労においても、教組へ組織分裂攻撃が開始され、事態待ったなしである。先進的労働

大阪

京都

京都

洛南戦労研が旗上げ

洛南戦労研が旗上げ



洛南労組連など地域共闘の実践が注目を集めた



洛南労組連など地域共闘の実践が注目を集めた

2•13

沖縄で反天皇制集会

‘87年天皇来沖阻止を誓う

二月十三日、沖繩・コザの社会福祉会館において「二・一」沖繩と天皇制を考える講演と討論集会が、同集会実行委の主催で開催された。集会実行委は、昨年七月皇太子来沖阻止闘争の牽引力となつた部分で形成されたものであり、集会は労働者・学生二〇名を結集してかちとられた。

集会の開始前に、昨秋以来、右翼との武装対決をたたかいぬいている山谷の労働者からの闘争報告がおこなわれた。

皇來沖阻止を誓う
開会された。

発におこなわれた。討論においては、強大な反天皇制戦線を構築していく必要性、そのために今後もこうした反天皇制のたたかいを系統的に積み重ねていくことが確認された。具体的には集会参加者が主体となって四月二九日に集会を設定し、さらにたたかいの輪を拡大していくことが意志一致された。沖繩を侵略反革命前線基地とし

るのであり、その頂点として八七年天皇来沖が設定されている。われわれはこれと対決する強大な反天皇戦線を建設していかねばならない。これの成否の鍵は、ひとえに今集会主催者である二・一実行委のプロレタリア政治闘争部隊としての強化と、その奮闘にかかるたかうだらう。

集会の開始前に、昨秋以来、右翼との武装対決をたたかいぬいて、山谷の労働者からの闘争報告がおこなわれた。

2 • 7

狭山鬪争に一万二千

東京・明治公園

二月七日 狹山再審東去四年
糾弾、特別抗告審闘争勝利中央総
決起集会が、東京明治公園において
て一万二千人の結集をかちとつた。
狹山闘争は、特別抗告審段階に入
つて三年、昨年十一・三一の鑑定・
補充書提出をもって、今春棄却阻
止をめぐる正念場を迎えた。今集
会は、特別抗告審下で明らかとな
った「小名木証言」を武器にこの
正念場に勝利するたたかいを全労
で築くことが確認された。集会に
むけて、獄中の石川一雄氏は、「い
よいよ狹山闘争は大詰中の大詰を
迎えている」「本審で完全無罪を
勝ち取る為の絶対にゆるぎない橋
頭堡を」「私は今後も如何なる事

態に遭遇しようとも権力犯罪と司法権力の横暴さを全人民の前に暴露する迄は正に最後の血の一滴までたたかい抜く覚悟でいる」と、明らかにし、「仮釈放よりも再審勝利をただひたすらたたかいたるにのみたたかう」という壯絶な決意を発するとともに、「組織労働者の取り組み」を強く訴えかけた。兄の仙吉氏（狭山支部長）は「この二ヶ月の山場を一雄と心をひとつにしてたたかおう」と呼びかけた。

芝山町議選 相川・石毛 両氏が当選

「で三年、昨年十一・三一」の鑑定。補充書提出をもって、今春棄却阻止をめぐる正念場を迎えた。今集会は、特別抗告審下で明らかとなつた「小名木証言」を武器にこの正念場に勝利するたたかいを全力で築くことが確認された。集会にむけて、獄中の石川一雄氏は、「いよいよ狹山闘争は大詰中の大詰を迎えていた」「本審で完全無罪を勝ち取る為の絶対にゆるぎない橋頭堡を」「私は今後も如何なる事

勝利をたたひたすらたたかいとするためにのみたたかう』という壯闘の決意を発するとともに、「組織労働者の取り組み」を強く訴えかけた。兄の仙吉氏（狭山支部長）は「この二ヶ月の山場を一雄と心をひとつにしてたたかおう」と呼びかけた。

二月十一日投票のおこなわれた
芝山町議選で、反対同盟は現職、
相川勝重、石毛博道両氏の当選を
かちとった。

権力・公団・革マルなどによる
反対同盟「分裂」につけこんだ怪
文書、謀略電話、運動員への暴行
が次々と発生する中で、反対同盟
・支援一体となつた連日の行動に
より、町民の空港公団批判票を集
めた。

今回当選した相川、石毛両氏は

日大銀ヘルの同志二名の不当起訴攻撃の中、現在四回にわたる公判闘争が、銀ヘルと全国のたたかせん

◎カンパ振込先
協和銀行新宿支店・〇一八七六五八・日本大学文理救援会

訴攻撃の中、現在四回にわたる公判闘争が、銀ヘルと全国のたたかう学生によつてたたかいぬかれてゐる。デ・ソチあげの張本人である反憲学連の川合は、日大当局・権力とともに公判において茶番を演じつつ、憲法九条解体を叫び、天皇を賛美し、報国学生運動の先兵としてその本性をあらわにしている。



公判闘争をたたかう戦闘的学生

今回当選した林ノ石毛同氏は一人とも東峰十字路公判の被告である。七一年九・一六機動隊三名

両氏が当選

芝山田議選

町議選の勝利ひきつき、自主基盤整備を貫徹し、三・二五現地闘争へ結集しよう。

コザ
て強化していく攻撃はとどまるところを知らない。そして同時に、沖縄人民の排外主義的統合をねらう攻撃が激化している。この攻撃

崩壊する総評運動にかわる 階級的労働運動を強化せよ

■□■はじめに

「もうたまらん」という労働者の切実な声が、いたるところで湧きあがっている。日本労働運動は春闘において、この九年間、賃上げ額をきわめて低くおさえこまれつづけ、とりわけ昨年の民間の賃上げ率は平均四・四%と、春闘史上最低の数字を記録した。

物価上昇や、税・保険料などの負担増を計算に入れるとき、生活が苦しくなってきたと、だれもが実感する限度にまできているといえる。さらに重要なことは、民間大手と中小企業間の賃金格差は拡大するばかりであることである。中小・零細に働く多くの労働者の生活は、統計にあらわれている以上に深刻なものとなつていていることは確実である。

しかし労働者にとって、自分たちの生活が苦しくなつてきていているというのもがまんならないことだが、より危機感を感じなければならぬのは、たたかうことによってのみ労働者の団結は強めることができるという、労働運動のもつとも重要な内容が、今日の労働運動のなかでおろそかにされていることである。それどころか、同盟・JCはもぢろんのこと、総評などの右派幹部たちも、これを軽視するにとどまらず、労働者の戦闘的意欲をそぎ、団結を弱め、むしろ資本家階級との階級協調の道をひた走っているのである。

このままであれば、労働（組合）運動の存在価値そのものが、まったくなくなってしまうことはあまりにもはつきりしている。そのことのひとつとして、昨年末、労働省が発表した雇用者数に占める労働組合員数の割合、すなわち労働組合組織率が二九・七%と、ついに三割を切つてしまつたことがあげられる。これはピーク時である一九四九年の五五・八%に比べると、ほぼ半減するに至つており、労働組合そのものに、労働者の利益を代表するという魅力がなくなってしまった結果であるともいえる。

現在の右翼潮流の指導する労働運動に、日本労働者階級の利益を代表しえようがないし、ましてや他国の労働者との連帯のたたかいなどは望みようがない。帝国主義本国の労働者たるわれわれは、本国の帝国主義の植民地主義支配下で、想像を絶する搾取と収奪をほしいままにされているアジア諸国の労働者人民との連帯戦を、日本のブルジョア階級とのたたかいのただなかから組織せねばならない

という階級的責任を負つてゐるのである。

そのような点をふまえて、われわれは日本労働運動を、真に労働者階級の利益に立脚した階級的労働運動として、再生させていかねばならない。

■□■資本の攻撃

八四春闘を前にして、資本家たちはこの数年間の春闘の結果に満足しながらも、なおかつ、どんなに「春闘そのものも必要ないのでないか」と、厚かましくも主張している。日経連会長大槻は、本年一月の臨時総会で「企業の繁栄がなければ生活向上がないこと」を痛感している民間企業労組の指導者の經濟認識なるものをほめたたえ、「昨春闘は賃金正常化の第一歩。今年もベア・ゼロ、賃上げは定期昇給程度でよい」といはなつた。また経団連会長の稻山にいたつては賃金凍結論を主張し、「賃金は収入として考えるだけでなく、コストとしてみるべきだ。そうすると（労働者が）賃上げを主張するのはおかしい」といはだりありさまである。

これらの資本家どもが主張の背景には、深まりゆく帝国主義間の強盗的抗争と、そのなかでの日本帝国主義の危機を、アジアへの侵略反革命の強化で突破していくとする野望が存在している。

アメリカ帝国主義は本年二月の国防報告で日本にたいする要求として、①八〇年代中にシーレーン（海上交通）防衛能力を達成すること、②武器技術の対米供与の一層の拡大をはかることなどを、具体的にうちだし明記した。このかんアジアでの軍事演習は日ましに拡大され、世界最大規模の米韓合同軍事演習（チームスピリットなど五大演習が毎年実施され、日本・オーストラリアなども含めた環太平洋合同軍事演習も定期化されつある。

この動向と歩調をあわせ、自民党は本年一月の党大会で、運動方針の主題として「国際社会に協調する平和国家、自由を守るたくましい文化国家を築こう」をかかげ、その内容として「①アジア諸国の安定と発展への貢献（II侵略）、経済力に応じた防衛努力（II軍備増強）、②強くたくましい国家機構をつくるための行政改革、財政改革、教育改革の大改革を行う（IIブルジョア独裁の強化、官公労働運動のたたきぶし、教育による人権の排外主義的統合など）」を打ちだし、改憲策動とともに、いよいよ露骨な戦争とファシ

ズムにむけた準備を急いでいる。

■□■総評の屈服

資本家階級がこれほどまでに攻勢的であり、自信にあふれているかのようにみえるのは、何よりも彼ら自身がいつていてるように、資本家階級の忠実な家来＝同盟・JCをはじめ、総評・民同も含めた労働貴族たちの活躍によるものである。

この数年間の春闘は、総評にとっては、ひたすら同盟・JC派にすり寄りつけた歴史であったといえる。本八四春闘においては、総評、同盟など労働四団体と全民労協が昨十一月に初の「賃金闘争連絡会」を発足させ、八四春闘の賃上げ要求統一基準を六%以上と決定するなどの事態が進行している。

この昨年の春闘の賃上げ要求よりも一%低い六%要求基準については、財界寄りの日本賃金研究センターでさえも「景気、企業経営がよくなつていてる点からみても、要求を下げるべき要因はまったく見当らない。結局、要求を下げたのは組合指導者が獲得率を上げたからではないか」というに至つているほどである。

これらのことと表わされているのは、現総評指導部が、闘争して労働者の階級的団結を強めていき、その強化された力に依拠して、資本家どもから譲歩をひきだすという観点、立場に立たないで、たたかわずに、話し合いという名のもとに、最初から資本家が許容できる分け前を与えてもらうといった立場に立つてゐることである。それはあたかも総評・民同の政治的代表たる社会党が、八四年度運動方針に「防衛費現状凍結、自衛隊違憲・合法論、委員長訪米（レーガンへの要望会談）などを盛り込み、「ニュー社会党」と称して、ひたすら「現実的方針」を追求してゐることに呼應してゐるかのようである。もちろんこの場合、現実的というのはブルジョアジーの意にかなう、彼らの許容範囲にあるということを意味する。

本年度は、春闘での賃上げ抑制以外にも、増税、公共料金値上げ、健保・年金改悪など、労働者の生活を圧迫する攻勢が目白おしに並んでいる。これらへの真っ向うからの対決を組織せぬかぎり、労働者の生活・生命はむしろまづいくばかりである。総評・民同が年金改悪に柔軟に対応という名の賛成への方針転換をしたことに象徴的なように、彼らは同盟

春闘アピール

・JCにひきずられながら、ブルジョアジーの攻撃に白旗をかかげるに至っているのである。

日本の労働運動が、帝国主義労戦統一＝民労協を軸にした一大反共ナショナルセントーの形成（労働運動の産業報国会化）へとつき進んでいる中において、日共とわれわれ階級的労働運動の再生・前進をめざすもののが、独自の運動と組織を準備しようとしている。

なかでも日共は、その主導で統一労組懇をつくり、一定の全国陣型を保持しており、いつも組織的分歧ができる条件を有している。しかしたとえば彼らは、八四春闘においても「三万円以上の賃上げ」などを独自方針として提起はしているが、問題は、いかに闘争を組織するのかであって、その点では日共もまた総評・民同とそれほどかわらず、資本への闘争をつうじて労働者の階級的団結を強化していくという階級形成の見地は、実践的にはほとんどみられない。日共は選挙での票の草刈り場としてのみ労働運動の戦場をとらえていっている。したがって日共は、労働運動戦線にあつては、社会党支持を強制する民同を批判し、その反対派としての位置をはつきりとさせれば事が足るのであり、また「政党支持の自由」が保障されればよいとするのが基本方針なのである。

このようないくつかの誤りを有している日共・統一労組懇ではあるが、現下の日本労働運動の大分解局面をとらえるとき、帝国主義的労組連は、日共・統一労組懇以外の数少ない反労戦統一勢力の一つではあるが、しかしそれはまだ質・量ともにきわめて不充分、脆弱な組織であり、この強化を徹底して急がねばならない。

全國に散在する反社共労働者の強化と統合をおしすすめ、また日本の労働者の七〇%以上を占める未だ組織されざる労働者のわれわれによる組織化を強力に推進し、現在、同盟・JC、民同に制圧されている組織労働者の運動と組織に大きなゆきぶりをかけ、情勢をわれわれのもとにひきよせるたたかいを展望せねばならない。

■ ■ ■ 党派闘争

全国労組連などや、その周辺に存在する左派労組の労働運動の前進を展望するときに、われわれは大衆運動戦線での大胆な共闘と統合

一戦線を追求していかねばならないが、同時にこれと結びつけて、厳格な党派闘争をも路線闘争として組織しつづけねばならない。

の第四インターには、きびしい批判が必要である。彼らは三里塚闘争においても典型なごとく、すべての大衆運動（政治闘争、労働運動を問わず）から、その戦闘性、原則性、プロレタリアートの独自性をはぎとり、闘争を右翼的に総括し、市民主義者の運動へと解体しようとする点で犯罪的な役割りを果たしている。また他方での急進民主主義党派たる中核派も、三里塚闘争にみられるように、誤まつた路線をつっ走っているばかりでなく、現下の日本労働運動の大活動と分解局面には、何の規定力も、路線的にも物質力としても有していないことを暴露している。

さて全国労組連はどうかといえば、現在の段階では、全国労組連の真の強化と戦略的展望に関して正しい方針が確立されておらず、問題点を機能的・形態的な点に求めているといふ点で大きな課題を残している。

全国労組連の結成の意義を「全民労協への政治的なアンチとして発足した点」にだけ求め、その延長上に現在の全国労組連を設定し、「センター機能が確立できなかつたことが決意的だった」とするのではなく、「全国戦線形成か地域・産別の反対派結集か」と二者を対立的に描きだすのも誤りであり、「全民労協との格闘は民間単産の組織問題としては結着した。次は官公労だ」という問題の設定も、政治的アンチとしてのみ全国労組連結成の意義を規定する誤りと結びついたとき、克服課題を回避し、新しい情勢に乗り移る重大な誤りだといえる。

問題は、階級的労働運動を全民労協と大衆的に分岐するかたちで、いかにして実践的・具体的に形成していくのかであり、階級的労働運動派が、総評の最終的解体局面で、これにかわるナショナルセントーとしての実質、何らかの全国的規定力を有するものとして、いかにして全国的布陣を準備できるのかであり、そして戦略的指針と一定の労働戦線における実践的規定力をもつた指導部をいかにして形成していくのかという点にある。それらのことをぬきにした指導部のセンター機能の強化は、幾度唱えようと相応の物質力と実体を有したものとなるはずもなく、形骸化してしまうことははつきりしている。

まず第一に、労資協調路線と対決し、職場末端からの闘争を組織しなくことである。賃金や労働条件をめぐるいかなる要求でも、重要なことは、そのたたかいをとおして労働者の団結が強まり、労働者のなかにたたかう意

欲をわかしめたかどうかである。

第二には、この数年間でいつそうひどくなつた労働者間の賃金・労働条件の格差の拡大を許さないたかいを組織することである。

企業規模の違いのみならず、男女労働者やその他あらゆる労働者の差別分断を許さない、労働者間の連帯戦として組織しなくていかねばならない。

このたたかいはさらに、官民分断をも許さない、各地域における官民共闘としても組織しつづけねばならないものである。昨春闘に

おいて、官公労労働者への人効凍結攻撃を資本家どもにうまく口実にされて、民間も極端に低く賃上げをおさえこまれたという連関性をみても、官民をつらぬくたたかいの重要性は、あまりにもはつきりしている。

第三には、未組織労働者の組織化に全力をふりしぶることである。全民労協が民間労組の半分以上を結集させたといつても、日本の全労働者数からみれば一〇%程度である。日本の労働者の七〇%以上は、いまだ労働組合に組織されていない未組織の状態にある。彼らを誰が組織していくのかということは、今後の日本の労働運動の道すじを決定するのに少なからぬ影響をおよぼす。われわれは劣悪な労働条件のもとにおかれている未組織労働者を断固として味方に引き入れ、日本労働運動の次の大分解局面に備えねばならない。

第四には、日本帝国主義がみずから危機の突破のために、アジアへの侵略反革命戦争を準備し、そのもとに労働者人民を総動員していくこうとするあらゆる攻撃とのたたかいを、労働運動の只中で組織しつづけていくことである。

ブルジョアジーは、企業を守れ、国を守れといふ國益国防論からする排外主義宣伝をつめている。第二次大戦への突入時にも、ブルジョアジーは國家の危機を理由に耐乏生活を強い、さらに日本とアジアの繁榮を名目にして中国などへの侵略反革命戦争をすすめていった。他の労働者との連帯戦は、日本労働者階級にとって歴史的な教訓としても存在しており、必ず強化しつづけねばならないたたかいである。

第五には、階級的労働運動の全国陣型の不可欠の物質基盤として、地域労組連・階級的労働運動の地域センターの建設・強化を全国的に実現しきることである。このことをしつかりとふまえて、戦闘的労組の全国的連合組織を形成・強化していくことである。すでにある「全国労組・活動家連絡会議」はそのようなものとして、すなわち名実ともに全国労組連として飛躍せしめねばならないのである。

第六には、労働組合の枠をこえて活動する先進的労働者の組織を、以上のすべてのたたかいの中で建設していくことである。

全国の労働者諸君！以上の任務のもと、八四春闘を全国でたたかぬこう！